

中学校音楽科教科書における日本の伝統音楽の取り扱いに関する研究 —平成 14 年度出版と平成 24 年度出版の比較を通して—

勝 部 遥 子

(本講座大学院博士課程前期在学)

Research on Handling of Japanese Traditional Music in Junior High School Music Textbooks: Comparison the 2002 Edition with the 2012 Edition

Yoko KATSUBE

Abstract

This research aims at clarifying about handling of traditional music in music textbooks by comparing the 2002 edition (based on the government guidelines for teaching 1998) with the 2012 edition (based on the government guidelines for teaching 2008). The materials for analysis are junior high school music textbooks and teacher's manuals which were published by Kyoiku Shuppan and Kyoiku Geijyutsusya in 2002 and 2012. Analytic viewpoints are subject matter name, the number of subject matters, teaching materials name, the number of teaching materials, classification, contents of instruction and teaching method, domain, and element.

The textbooks published in 2002 has many appreciation domains and folk song accounts for a large portion of the contents of study. The textbooks published in 2012 has many expression domains and the elements of the traditional music included in the contents of study increased.

In the contents of instruction, as shown by the government guidelines for teaching, Japanese traditional music came to be thought as important also with textbooks, and it became clear that it can learn now deeply.

1. はじめに

昭和 22 年度に我が国で最初の学習指導要領が提示されて以降、戦後の新時代に合う音楽教育制度の確立のため、文部省は西洋音楽を中心とした教育を推進した。学習指導要領において伝統音楽について明記されていたものの、実質的には小・中学校の義務教育や高等学校では西洋音楽を学ぶことが主流になっていた。しかし今日国際化が進み、他国の文化を学びながら自国の文化や伝統を尊重することが重要であるとされ、伝統音楽の指導の必要性について言及されてきている。平成 20 年 1 月の中央審議会の答申（文部科学省 2008, p. 3）においては、改善の基本方針として、「国際社会に生きる日本人としての自覚の育成が求められる中、我が国や郷土の伝統音楽に対する理解を基盤として、我が国の音楽文化に愛着をもつとともに他国の音楽文化を尊重する態度等を養う視点から、学校や学年の段階に応じ、我が国や郷土の伝統音楽の指導が一層充実して行われるようにする。」と示されている。

平成 10 年度と平成 20 年度改訂の中学校学習指導要領のうち、音楽科で伝統音楽についての事項を比較すると、以下のような違いが見られる。

- ・表現教材について：平成 10 年度版では、民謡を重視しているが、平成 20 年度版では、音楽の種類を限定せず、その項目の中で、特に民謡や長唄など伝統的な声の特徴を感じ取れるものを扱うように記載されている。

- ・鑑賞内容について：平成10年度版では、「我が国の音楽」という表記であったのに対し、平成20年度版では、「我が国や郷土の伝統音楽」となっており、伝統音楽についての内容が重視されている。
- ・鑑賞教材について：平成20年度版の解説に「我が国や郷土の伝統音楽を重視した」と記述されている。
- ・共通事項の用語の中に、我が国の伝統音楽の要素である、「間」「序破急」が記載されている。

学校教育における伝統音楽の意義や位置づけ、児童生徒への影響に関する実践的な先行研究として、山内(2001)、小島(2001)、山村(2007)があげられ、教科書の伝統音楽の学習の現状について韓(2004)が韓国と日本を比較考察しているが、新学習指導要領に関しては検討されていない。

そこで筆者は、伝統音楽の指導の充実が明記された平成20年度改訂の学習指導要領に伴い、中学校音楽科教科書における伝統音楽についての指導内容がどのように変わったのかに着目する。

本研究では、平成20年度改訂中学校学習指導要領に対応して出版された中学校音楽科教科書を、平成10年度改訂中学校学習指導要領に対応して出版された中学校音楽科教科書と比較しながら、音楽科教科書における伝統音楽の取り扱いについて明らかにすることを目的とする。

分析対象は、平成10年度と平成20年度に学習指導要領が改訂されて最初に出版された、平成14年度と平成24年度の教育出版、教育芸術社の2社から出版された中学校音楽科教科書および教師用指導書である。分析は、題材名、題材数、教材名、教材数、分類、指導内容・指導方法、領域、要素の全8観点で行う。「題材数」、「教材数」は、その学年の全ての題材数、教材数のうち、日本の伝統音楽の題材がどれほどの割合を占めるかを示したものである。「分類」は、福井昭史『よくわかる日本音楽基礎講座』(2006)に載っている分類法を参考にした。「要素」とは、伝統音楽のどのような要素が指導に含まれているかを示したものである。

2. 平成14年度出版中学校音楽科教科書

(1)『中学音楽 音楽のおくりもの』教育出版

本項では、教育出版が平成14年度に発行した『中学音楽 音楽のおくりもの』第1学年から第3学年の3冊のうち、伝統音楽に関する指導についての事項を分析する。

表1 平成14年度 教育出版『中学音楽 音楽のおくりもの』

学年	題材名	題材数	教材名	教材数	分類	指導内容・指導方法	領域	要素
1	音楽をとoshくらしを知ろう	2/11	日本の祭りの音楽と芸能	2/28	民謡	・インターネットやお祭りに携わっている人々にインタビューをするなどして、各地のお祭りを調べる。	鑑賞	
	儀式と音楽		越天楽		雅楽	・雅楽で用いられている楽器の現代の独奏曲を鑑賞させる。 ・速度の変化を聴き取らせる。	鑑賞	速度の変化
2・3上	日本の音楽のあじわい	1/9	六段の調	1/30	箏曲	・「さくらさくら」を歌とリコーダーで演奏し、その後で演奏させる。 ・「六段の調」を鑑賞し、音やリズム、テンポの変化を聴き取らせる。 ・箏の奏法を知り、「さくらさくら」を演奏させる。	鑑賞 器楽	速度の変化
2・3下	日本の民謡に親しもう	2/10	ソーラン節	2/29	民謡	・「ソーラン節」と「とうばらーま」を斉唱し、雰囲気や表現の違いを感じ取らせる。 ・日本の音階が使用されている曲を聴かせ、聴き分けさせる。 ・現在歌われている、民謡を取り入れた歌謡曲を鑑賞させる。	歌唱 鑑賞	コブシ 非拍節 音階
			とうばらーま					
	日本の舞台芸術		勸進帳		三味線 音楽	・楽器の特徴を調べさせ、実際に演奏させる。 ・黒御簾での演奏についても資料の提示をする。 ・長唄の発声や節回しの特徴をとらえ、鑑賞させる。 ・指揮者がおらず、掛け声で合奏するため、ズレが生じるが、そのことが日本音楽の特徴であることに気付かせる。	鑑賞 器楽	発声 節回し ズレ

題材に関しては、全学年を通して、扱われている日本の伝統音楽は少ないが、その中で民謡が第1学年と第2・3学年下で2回取り上げられている。第1学年ではお祭り芸能、第2・3学年下ではお祭りを除く各地の民謡について扱っている。

「越天楽」では、雅楽で用いられている箏や箏、笙などの現代の独奏曲を鑑賞する活動を取り入れており、現代の雅楽について知り、その多様性を感じさせる内容になっている。

「六段の調」では、この曲の特徴でもある、テンポの変化を聴き取る活動を行っている。また、実際に箏に触れる活動もあり、「さくらさくら」の演奏へとつなげているが、箏で演奏する前に歌唱とリコーダーで「さくらさくら」を演奏する活動を入れている。このことより、歌唱とリコーダーで演奏することで曲を思い出させ、スムーズに箏で演奏する活動に入ることができるようにしていると考えられる。

「勸進帳」では、実際に三味線を体験させることや、囃子や長唄の特徴や、「ズレ」などの日本音楽の特徴について学習することなど、さまざまな面から歌舞伎について学ぶ内容になっている。

(2) 『中学生の音楽』教育芸術社

本項では、教育芸術社が平成14年度に発行した『中学生の音楽』第1学年から第3学年の3冊のうち、伝統音楽に関する指導についての事項を分析する。

表2 平成14年度 教育芸術社『中学生の音楽』

学年	題材名	題材数	教材名	教材数	分類	指導内容・指導方法	領域	要素	
1	雅楽に親しもう	2.8	陵王	3/35	雅楽	・舞楽、管絃の特徴を学ばせる。 ・管絃の楽器編成とオーケストラの違いやつながりを意識させる。 ・テンポの変化や鞆鼓のリズムを聴き取らせる。	鑑賞	速度の変化	
			越天楽						
	楽器の響きを通していろいろな音楽に親しもう		津軽じょんがら節		民謡	・グループで調べ学習を行わせ、発表させる。 ・楽器の響きと特徴を感じ取らせ、和太鼓を体験させる。 ・和太鼓でリズムを作らせる。 ・地打ちと上打ちのリズムパターンから選んで組み合わせる。	鑑賞 創作 器楽		
			神田ばやし エイサー						
2・3 上	尺八と箏に親しもう	2.10	巢鶴鈴慕	3/37	尺八楽	・拍節的な部分と非拍節的な部分が混在し、間があることに気付かせる。 ・実際に尺八を体験させる。	鑑賞 器楽	間 非拍節	
			六段の調		箏曲	・実際に体験させる。 ・ギターやハープと比較し、親しませる。			鑑賞 器楽
	歌声を通していろいろな音楽に親しもう		草津節		民謡	民謡	・日本の民謡を鑑賞し、それぞれを仕事歌、踊り歌、祝い歌、子もり歌に分類させる。 ・背景と拍子、音階、リズム、テンポなどの特徴を説明する。 ・コブシなどを意識して歌わせる。 ・その際、手拍子など役割を分担させる。	鑑賞 歌唱	
			谷茶目						
			もっこ 大漁節						
2・3 下	能・文楽・歌舞伎を通して日本の伝統芸能に関心をもとう	2.8	船弁慶	4/41	能楽	・謡の独特な発声に着目させる。 ・楽器について知り、日本音楽の特徴や、間について理解させる。	鑑賞	間	
			木遣の段		三味線 音楽	・太夫、三味線、人形の特徴を理解させる。			鑑賞 器楽
			音楽や芸能を通してそれぞれの国や地域の特色に関心をもとう		勸進帳	三味線 音楽	・衣装、メイク、飛び六法などに注目させる。 ・囃子の奏法や、三味線の種類について理解させる。 ・三味線を体験させる。 ・ギターと比較させる。	鑑賞 歌唱 器楽	
	鹿踊り				民謡	民謡	・歌わせたり、楽器を演奏させたりする。 ・舞踏など身体表現をすることで、基礎的な能力を養う。 ・調べ学習を行う。		
	越中おわら風の盆 天神祭								

題材に関しては、民謡に関する題材は、第1学年で楽器を通して民謡に親しませ、第2・3学年上で歌を通して民謡に親しませ、第2・3学年下では、歌唱や器楽に加えて、舞踏など身体表現をすることで民謡を体験させる内容となっている。また、各学年で題材数は2つであるが、民謡と雅楽、民謡と和楽器、民謡と総合芸術など、民謡とその他の日本の伝統音楽という2種類で構成されている。

雅楽については、「陵王」と「越天楽」を扱うことで舞楽と管絃について理解させ、管絃についてはオーケストラと比較することで共通点や相違点を見つけさせる学習内容である。

「巢鶴鈴慕」も「六段の調」も、実際に和楽器を体験しながら学習し、箏においてはギターやハープと比較しながら親しませる内容となっている。

「勸進帳」では、三味線についての学習が中心となっており、体験させながら種類や奏法を学び、ギター

と比較させている。

領域に関しては、鑑賞から歌唱、器楽、創作などの表現領域につなげている。

(3) 考察

教材の内容を歌唱、器楽、創作、鑑賞の4領域に分けて2社で比較すると、表現領域と鑑賞領域の割合は、教育出版でおよそ37%：63%、教育芸術社でおよそ47%：53%という割合であり、教育出版は圧倒的に鑑賞領域が多く、教育芸術社は表現領域と鑑賞領域がほぼ半分の割合で扱われている。教育芸術社では、鑑賞の授業において、その教材で用いられる楽器を実際に体験させる活動につなげており、学習指導要領で、音楽の多様性を楽器の音色や奏法と歌唱表現の特徴から理解するように示されているためであると考えられる。

また、学習内容に含まれている伝統音楽の要素を2社で比較すると、両者とも要素の数は8個であるが、大きく異なったのが、「発声」と「節回し」という伝統的な歌唱に見られる要素と、「間」である。

全体的に、平成10年度は民謡が多くの割合を占めている傾向が見られた。これは学習指導要領において、郷土の民謡を重視していたためであると考えられる。

また、教育芸術社において、雅楽をオーケストラと比較したり、箏をギターやハーブと比較したり、三味線をギターと比較する活動が見られることから、西洋の楽器と日本の楽器を比較しながら学習するような内容になっていたことがわかる。

4. 平成24年度出版中学校音楽教科書

(1) 『中学音楽 音楽のおくりもの』教育出版

本項では、教育出版が発行した『中学音楽 音楽のおくりもの』第1学年から第3学年の3冊のうち、伝統音楽に関する指導についての事項を分析する。

表3 平成24年度 教育出版『中学音楽 音楽のおくりもの』

学年	題材名	題材数	教材名	教材数	分類	指導内容・指導方法	領域	要素
1	郷土の民謡の魅力	3/20	ソーラン節	5/29	民謡	・「沖揚げ音頭」と比較鑑賞し、声の出し方や、音頭一同形式などの歌い合わせ方の特徴を感じ取らせる。 ・「かりほし切り歌」と比較鑑賞し、相違点と共通点をまとめさせる。	歌唱 鑑賞	非拍節 音頭一同形式 コブシ 産み字
	人々のくらしと音楽		日本の民謡と芸能		民謡	・リズムや音階、発声、合わせ方などに着目させる。 ・日本の民謡や芸能と身近な地域の民謡や芸能を比較する。	鑑賞	音階 発声 非拍節
	和楽器の魅力や味わい		六段の調		箏曲	・序破急を覚悟させる。 ・「鹿の遠音」と比較し、音階や構成について理解させる。	鑑賞	序破急 間 音階
			民謡を楽しもう「こきりこ節」		民謡	・「ソーラン節」などと比較して、言葉の抑揚と旋律の関係、背景の違いなど感じ取り、表現を工夫させる。	鑑賞 歌唱	産み字 節回し 囃し言葉
	箏を弾いてみよう「さくらさくら」	箏曲	・奏法を身に付け、平調子の響きや間を味わいながら演奏する。	器楽	間 音階			
2・3上	日本の伝統音楽の魅力	2/18	越天楽	5/36	雅楽	・拍節的なリズムと非拍節的なリズムを感受させる。 ・序破急による形式を理解させる。 ・代表的な舞楽を鑑賞し、比較させる。	鑑賞	間 序破急 非拍節
	日本の伝統的な声の特徴		勤進帳		三味線音楽	・声の出し方や旋律の特徴に着目して鑑賞させる。 ・三味線の伴奏と唄との関わり合いや役割について着目させる。 ・歌舞伎における長唄の役割を理解させる。	鑑賞	発声 節回し 産み字 非拍節 間
2・3上	日本の伝統的な声の特徴	2/18	「越天楽」を体験しよう	5/36	雅楽	・CDの演奏に合わせて、身近な楽器で演奏させる。 ・箏の旋律を唱歌で唱え、旋律の特徴を感じ取らせる。	器楽	間 音程の変化
			歌舞伎を体験しよう		三味線音楽	・見得を切る、ツケ、囃子の三つの要素を体験させる。 ・打楽器と掛け声で囃子を体験させる。	器楽	
			月ぬ美しや		民謡	・民謡の旋律を感じ、歌詞の発音から音楽の流れを味わわせる。	歌唱	音階

2・3 下	郷土の民謡を味わおう	4/16	子守歌	7/31	民謡	・しゃくり上げる歌い方や、囃子ことばの表現を工夫させる。 ・比較して、歌う目的や音階の違いなどを理解させる。	歌唱	節回し 音階 囃し言葉
			谷茶目					
	総合芸術の魅力 ―能―		羽衣		能楽	・地歌の声の出し方や楽器との合わせ方、音楽と舞台の表現との関係を整理させる。	鑑賞	非拍節 節回し 発声
	総合芸術の魅力 ―文楽―		文楽「義経千本桜」		三味線 音楽	・太夫の声の出し方や三味線との合わせ方について整理させ、三味線の音色や太夫との関わりから特徴をとらえさせる。	鑑賞	発声 非拍節
			能の音楽を体験しよう 「羽衣」		能楽	・微かな音程をとらえ、姿勢と呼吸に注意して謡の部分や歌わせる。 ・日本の音の動きや間を感じながら、打楽器のリズムを手や身近な楽器で打たせる。	歌唱 器楽	発声 音程の変化 音階 間
	箏曲をつくろう		箏曲をつくろう		箏曲	・平調子の響きを感じ取り、カードのフレーズを参考に、リズムや旋律を反復、変化させて作品をつくる。	創作 器楽	音階
			郷土の民謡や芸能を受け継ごう		民謡	・身近な地域に受け継がれる民謡や芸能、祭の音楽の由来や特徴、背景を調べ、鑑賞する。 ・「子守歌」や「谷茶目」と比較しながら表現する。	鑑賞 歌唱	

「越天楽」では、序破急や拍節的なリズム、非拍節的なリズムなどの要素を学習する内容で、舞楽と比較を行う。付随して、越天楽で用いられる楽器を身近な楽器に代替し、音程の微妙な変化などを味わわせる活動がある。

「勧進帳」では、発声や産み字や節回しなど、長唄の特徴や、三味線との関わりについて学習する。また付随して、歌舞伎の特徴的な要素を体験させる活動がある。

「羽衣」では、面などの能の特徴的な要素や地歌の特徴を理解させる内容である。また付随して、謡の部分や打楽器の部分や体験させることで、微妙な音程や間を感じ取りさせる活動がある。

箏曲をつくる活動では、旋律パターンを箏で演奏して、自分なりにイメージをし、組み合わせるようになっていく内容になっている。

領域に関しては、鑑賞だけでなく、歌唱や器楽につなげたり、表現領域のみの題材も見られる。

要素に関しては、節回しや産み字、音程の微妙な変化など、声楽に関する要素が多くあった。また、序破急という速度の変化を表す用語が出てくるようになった。

(2)『中学生の音楽』教育芸術社

本項では、教育芸術社が平成24年度に発行した『中学生の音楽』第1学年から第3学年の3冊のうち、伝統音楽に関する指導についての事項を分析する。また、教科書と関連させるよう指示がある教材が『中学生の器楽』の中にあるため、器楽の教科書のその部分のみ、一緒に分析を行う。

表4 平成24年 教育芸術社『中学生の音楽』

学年	題材名	題材数	教材名	教材数	分類	指導内容・指導方法	領域	要素
1	日本の伝統音楽に親しもう	2.16	六段の調	3/36	箏曲	・歴史、流派、奏法を映像や資料で説明する。 ・奏法による音高や響きの微妙な変化を感じ取らせる。 ・速度やリズムの変化を感じ取り、序破急について理解させる。 ・実際に箏に触れさせる。 ・箏を平調子にして旋律をつくらせる。	鑑賞 器楽 創作	序破急 余韻の変化
1	日本の伝統音楽に親しもう	2.16	巢鶴鈴幕	3/36	尺八楽	・楽器の歴史、特徴、奏法を映像や資料で説明する。 ・奏法が楽曲にどのような効果をもたらしているのかを感じ取らせる。 ・自由リズムの特徴や、間を感じ取らせる。 ・実際に尺八を体験させる。	鑑賞 器楽	間 非拍節
	日本の民謡に親しみ、声や音楽の特徴を感じ取ろう		日本の民謡		民謡	・各地の民謡の音楽的特徴を考えさせる。 ・リズムや拍によって違いが生じることを感じ取らせる。 ・コブシに注目させ、歌う活動につなげる。	鑑賞 歌唱	非拍節 発声 コブシ

2・3 上	日本の伝統音楽に親しもう	2.16	勸進帳	3/35	三味線音楽	・声の特徴や旋律の動き、発声、産み字に関して感じ取らせる。 ・発声や姿勢、旋律の高低を意識して歌わせる。 ・歌舞伎には能から題材を得た作品が多くあることを説明する。	鑑賞 歌唱	産み字 発声 節回し
			文楽「新版歌祭文」から「野崎村の段」		三味線音楽	・太夫と三味線について、セリフと情景描写の表現の違いを通して感じ取らせる。 ・太棹三味線の特徴を、長唄で用いられる細棹三味線と比較して理解させる。	鑑賞	
	日本の郷土芸能に親しみ、その音楽の特徴を味わおう。	日本の郷土芸能	民謡		・各地の特徴を理解させる。 ・特徴と踊りと祭りの関わりを学ばせる。 ・自分たちの地域の郷土芸能を調べさせる。	鑑賞	発声 非拍節	
2・3 下	日本の伝統音楽に親しもう	1.14	越天楽	2/36	雅楽	・舞楽と管絃があることを説明する。 ・楽器の音色や役割など特徴を聴き取らせる。 ・テクスチャを理解させる。	鑑賞	ズレ 速度の変化
			羽衣		能楽	・能には謡があることを説明し、発声や節回しに着目させる。 ・速度やリズムの変化、拍や間などを聴き取らせる。 ・面や舞台について取り上げたり、発声や体の動きの特徴を感じ取らせる。 ・能が他の舞台芸術に与えた影響を説明する。	鑑賞	発声 節回し 速度の変化 非拍節 間
器楽	「六段の調」の学習の際に扱う	「勸進帳」と関連させて取り上げてもよい	箏を平調子に調弦して旋律をつくろう		箏曲	・1小節のみ指示してあり、それに続けて旋律をつくらせる。 ・「さくらさくら」のリズムを参考にしてよい。	創作 器楽	音階
	「寄せの合方」に挑戦しよう		三味線音楽		・奏法を習得し、三味線で演奏したり、リズムパートを手で叩き、アンサンブルをする。	器楽	速度の変化	

題材については、日本の伝統音楽に親しもうという題材で、第1学年では和楽器を取り上げ、第2・3学年上では三味線音楽、第2・3学年下ではその他の日本の伝統音楽を取り上げている。また、民謡についての題材から郷土芸能になり、第2・3学年下では、世界の音楽へと発展していく。

「六段の調」では、序破急を理解し、奏法による音高の微妙な変化を実際に体験しながら感じ取らせる活動を行う。また、平調子の音階の特徴を感じ取り、旋律を作る活動も取り入れている。

「勸進帳」では、発声や節回しなどを意識して歌わせるなど、長唄について重視されている。また、歌舞伎が能から題材を得た作品が多くあることを説明する。器楽の教科書に記載されている、三味線とリズムのアンサンブルでは、「勸進帳」と関連させてもよい、とされている。

「越天楽」では、雅楽の楽器やテクスチャを理解させることに重きをおいており、伝統音楽の要素として、ズレが含まれている。

「羽衣」では、謡や囃子、面などの能の要素について、満遍なく扱い、能が他の舞台芸術に影響を与えていることも説明する。

領域については、鑑賞から歌唱や器楽などの表現領域へとつながる活動はあるが、郷土の芸能と文楽、能楽においては、鑑賞のみである。

要素に関しては、産み字やコブシ、節回しなど謡に関する要素が多く含まれている。

(3) 考察

教材の内容を歌唱、器楽、創作、鑑賞の4領域に分けて2社で比較すると、表現領域と鑑賞領域の割合は、教育出版でおよそ57%：43%、教育芸術社でおよそ47%：53%となっている。この結果から、教育出版では表現領域が占める割合のほうが高く、教育芸術社では、ほぼ半分の割合であることがわかった。教育出版においては、歌唱や器楽の領域のみで構成されている授業が多いためであるが、1つの教材の取り扱いが、鑑賞と演奏体験とに分けられて教材化されており、学校の実態に合わせて扱うことができるようになっている。教育芸術社を見ると、1つの教材の中で鑑賞と歌唱・器楽を同時に取り扱う学習内容となっている。このことから、それぞれ記載の仕方は異なるが、取り扱う内容はどちらも同じであることがわかった。

また、学習内容に含まれている伝統音楽の要素を2社で比較すると、教育出版の方が要素の数が多

ことがわかる。大きく異なるのが「音階」である。

また、発声・コブシ・節回し・産み字など伝統的な歌唱の特徴である要素が多く、これは学習指導要領で、民謡や長唄など伝統的な声の特徴を感じ取れるものを扱うよう記載されているためであると考えられる。

5. 平成 14 年度出版と平成 24 年度出版の伝統音楽指導の比較

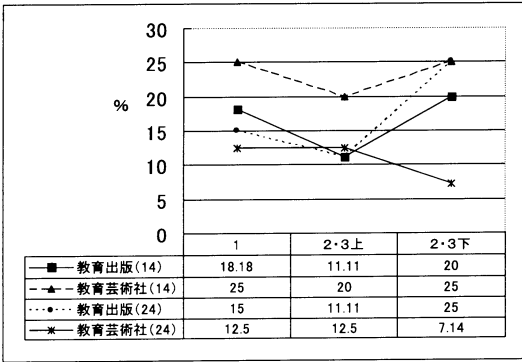


図 1 題材数の比較

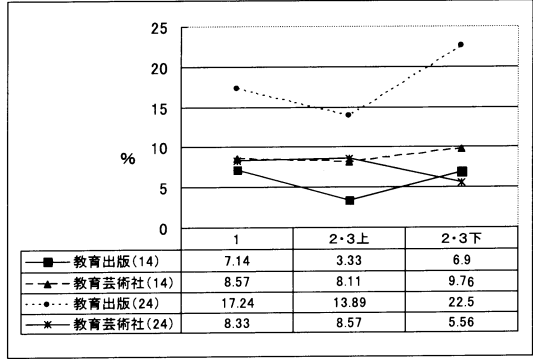


図 2 教材数の比較

図 1 と図 2 は題材数と教材数の全体数を 100 とした場合の、伝統音楽の割合を示したものである。題材数については、平成 14 年度出版の教育芸術社が全体的に高い割合であった。それぞれの出版社で比較すると、教育出版の第 1 学年では減少し、第 2・3 学年上では変化がなく、第 2・3 学年下では増加しているものの、教育芸術社においては全ての学年で減少していた。教材数について、それぞれの出版社で比較すると、教育芸術社では第 2・3 学年下で少し減少しているものの、ほとんど変わらないのに対し、教育出版では、全ての学年で増加しており、非常に数が多い。これより、伝統音楽についての題材数や教材数に関しては、教育芸術社の教科書では反映されていないことがわかった。

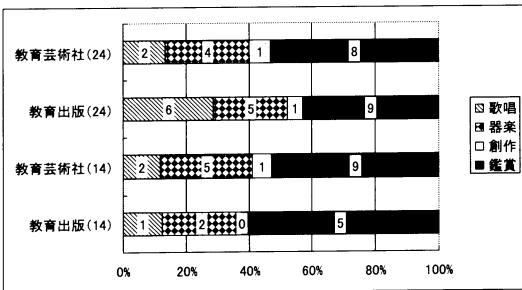


図 3 領域の比較

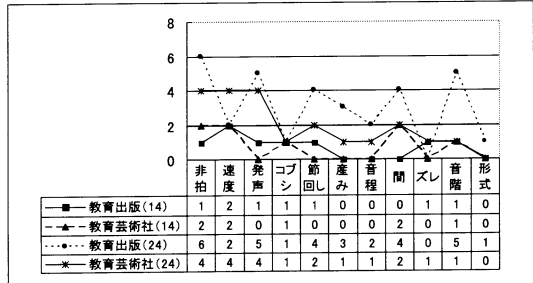


図 4 要素の比較

図 3 は領域の分布の比較を行ったものである。伝統音楽の指導において、平成 14 年度では鑑賞領域が圧倒的に多いのに対し、平成 24 年度では表現領域が増加し、実際に生徒が体験しながら学習する内容に変化した。このことは、日本の伝統音楽の授業を鑑賞の形態だけでなく、歌唱や器楽、創作につなげたり、独立して表現領域として扱うなど、実際に体験することを通して、伝統音楽を親しみやすくし、生徒に特徴やよさを味わわせることができるからであると考えられる。

図 4 は、学習内容に含まれる伝統音楽の要素についての比較を行ったものである。ズレに関して教育出版のみ減少していたものの、その他全ての項目において大幅な増加が見られた。内容に関しても、平成 14 年度では楽器についての内容が多く占めていたが、平成 24 年度では長唄などの声楽部分を重視しており、器楽から歌唱へと視点が変化している。また、西洋の楽器と日本の楽器とを比較する学習内容から、日本の楽器をさまざまな角度から理解する内容へと視点が変化している。以上のことから指導内容においては、学習指導要領で示されたように、日本の伝統音楽が教科書でも重視されるようになり、深く学習することができるようになったことがわかった。

<引用・参考文献>

- ・韓美暎（2004）「学校音楽教育における伝統音楽の学習に関する一考察：韓国と日本の中学校音楽教育の比較を通して（I 指導内容の構成とその体系，IV 指導内容とカリキュラム）」『日本学校音楽教育研究会紀要』第8号，pp. 95-96.
- ・宮下俊也・小島美子・西村朗・小暮朋佳・福士幸雄・澤田篤子（2001）「学校教育において日本伝統音楽の学習をどう位置づけたらよいか」『日本学校音楽教育研究会紀要』第5号，pp. 151-152.
- ・三好恒明（1981）「日本伝統音楽の教育」『岡山大学教育学部研究収録』第56号，pp. 125-131.
- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領（平成20年9月25日）解説—音楽編—』教育芸術社，pp. 3-4.
- ・福井昭史（2006）『よくわかる日本音楽基礎講座』音楽之友社，pp. 8-9.
- ・山内雅子（2001）『音楽指導ハンドブック 24 日本音楽の授業—伝統音楽のこころを大切にしてく・うたう・おどる・かなでる・つくる』音楽之友社，pp. 9-11.
- ・山村朋子（2007）「日本伝統音楽および郷土の音楽の学習に関する研究—「総合的な学習の時間」における取り組みに着目して—」広島大学大学院教育学研究科生涯活動教育学専攻音楽文化教育学専修修士論文，pp. 1-70.
- ・畑中良輔ほか（2002，2012）『中学生の音楽1～2・3下指導書 実践編』教育芸術社.
- ・教育出版株式会社編集局員編（2002，2012）『中学音楽 音楽のおくりもの1～2・3下教師用指導書 解説編』教育出版.